ソーシャルワーカーのクリニカル・パール⑤

いちばんの理解者であると認識されること

一般社団法人 WITH 医療福祉実践研究所　がん緩和ケア部　田村　里子

ソーシャルワークの実践場で多くの出会いと学びを得てきた。蓄積している多くの言葉、語り…、それらは時に高く厚い壁に怯む自分を奮い立たせ、関わるエネルギーを湧きたたせるメッセージである。

・「この人は、自分のことを、いちばんわかってくれる人…」

多重がんで PCU に入院した70代の男性、人生を振り返る日々の中で、新聞紙や広告のカラー印刷部分でちぎり絵を作成していた。「誰かにも身近な材料で楽しんでもらえたら」と仲間づくりもされていた。夫として父としてまた元同僚の指導者として、豊かな繋がりが来訪者から伺い知れた。

ご家族に、「この人は、自分のことをいちばんわかってくれる人…」とワーカーを紹介された。その瞬間、この方の歩んできた人生のほんの一瞬を共に過ごしているだけの自分がこの方の何を分かっているというのだ。思い違いをされている。人生を共にされてきたご家族にそんなことを言うなんて。と、居心地の悪さに困惑し否定の言葉を口ごもった。その後も担当ワーカーとして訪床し、ライフレビューの語りに耳を傾け傍らに過ごした。

お看取り後、ご家族が来室され「本人をほんとうに理解してくださりありがとうございました。『ここはわかってくれている人がいるから安心なんだ』と最期まで穏やかでした。」と手紙を下さった。

いのちの終わりの限られた時間を生きる人を支えエンパワーメントすることは、困難で力及ばぬことと感じる。しかし「理解者として認識されること」がその可能性となることを、当事者から示唆された言葉であった。

・「こんなにわかってもらえる　って…」

チーム医療はその必要性や重要性が強調されるが、実現に困難は多い。所属の医療チームは各専門職の専門性や自由度が高く、多職種メンバーでの活発な意見交換がカンファランスでは行われ、メンバーは皆チームでより良いことを提供したいと熱く必死であった。

チームの医師は癌性疼痛からの解放へ情熱を傾け、率直で直截な物言いが時に看護のチームメンバーの陰性反応を引き出し意見の相違が対立関係となっていた。

ワーカー室へ情報共有に来室され、医師という専門職の自負や患者に最善を！の熱い思い、チームリーダーとしての責任感、苦悩や壁を語られ、耳を傾けた。しばしの語りの後「こんなにわかってもらえる　って…」と無言になられ、共にその沈黙を共有した。

医療チームは患者家族の人的な医療資源であり、ソーシャルワーカーはチームに介入し整備する。チームビルデイングは、ビジョンに向けチームメンバーへのアプローチを的確に重ねていく実践である。他職種のメンバーに「いちばんの理解者であると認識されること」が、クライエントのアドボカシーを有効にし、チームへの介入とチームビルデイングにつながることを学んだ言葉であった。

対象者に「いちばんの理解者であると認識されること」。ここで重要なのは、ソーシャルワーカーが「対象者を理解した」のではなく、対象者にソーシャルワーカーが「理解者として認識されること」である。両者は同じようで全く異なるものである。

ソーシャルワーク実践において、対象者のクライエントやチームメンバーから「いちばんの理解者であると認識されること」の意味が、伝えられたとしたら幸いである。

（事例は、個人を特定する情報を極力削除または再構成したものである。）